

下村観山筆「不動尊」研究 —晩年の仏画制作に関する一考察—

本間 真理 (学習院大学)

下村観山(1873-1930)筆「不動尊」(大倉集古館蔵)は、大正14年(1925)に三越呉服店で開催された淡交会第2回展へ出品された作品である。本作は、岩上に結跏趺坐する不動明王と二童子を、紺地に金泥で描いたものだが、その描法は通行する同種の仏画とは大きく異なっている。燃え上がる炎光は金銀泥を塗り重ねて精緻に描き、岩は水墨画に通じる粗い筆致で質感をあらわし、これらによって濃紺の素地であらわされた不動明王の肉身を浮かび上がらせている。図様は高野山で実見した「不動明王二童子像(通称「赤不動」)」(明王院所蔵)を転用したもので、これに着想を得たことは指摘されてきたが、作画状況や制作背景についての詳細な研究はなされていない。本発表では、観山が師と仰いだ岡倉天心(1863-1913)の密教についての言説と、本作を制作する直接の契機となった大正9年(1920)の再興院展同人の高野山旅行に注目して、観山による本作の制作意図を考察したい。

観山は同時代の画家から「岡倉先生の頭が下村さんの腕を動かしていた」と回想されるほどに、天心に心酔しており、本作の表現の背景にも天心による「古画模写事業」と、日本美術の思想的基盤として仏教を重視する姿勢が影響したと思われる。不動明王との関係では、『東洋の理想』(The Ideals of the East, 1903年)の「平安時代」の項が注目される。天心は、この時代における真言密教の重要性を指摘したうえで、五智如来の第二を「不動(Fudo)」と表記して「知識としての力(power, which is knowledge)」と説明し、その具体的な現れは「シヴァの恐ろしい姿、炎のなかから現れる永遠の青の壮大なヴィジョン(stands for the terrible form of Siva, the grand vision of the eternal blue, rising out of fire)」であるという。青は不動明王の肉身の色であり、炎光を含めて前述した本作の表現に通じるイメージといえる。

本作を制作する直接の契機となった、大正9年(1920)の再興院展同人との大規模な高野山旅行については、参加した画家たちの回想から「赤不動」に強い衝撃を受けたさま、また実見した尊像などが知られる。観山はその直後に、「赤不動」(1921年)や2点の「如意輪観音」(1921年、水野美術館蔵)(1924-26年頃、東京国立近代美術館蔵)といった尊像の模写を制作しており、その過程で天心のかつての教えを改めて想起し、表現の飛躍へと向かったと思われる。

以上の検討を通じて、本作は真言密教の聖地である高野山で仏の力を体感し、伝統的な仏画に範をとりながら自身のなかに湧き上がった不動明王の姿を描いたもので、本格的な仏画として、また近代における仏画制作を考えるうえで重要な作品であることを提示したい。